書　評

社会保障研究所編『スウェーデンの社会保障』

（東京大学出版会，1987年8月）

——スウェーデンの社会保障を総合的，体系的に紹介する初の本格書——

都　倉　栄　二

私は外交官として長い外国生活でいろいろな社会に住み，さまざまな経験を重ねてきたが，ロッド空港事件当時のイスラエル大使としての経験を別にすれば，1975年から78年まで在勤していたスウェーデンについては，ことのほか印象深いものがあった。

スウェーデンは，まことに平和に徹した国である。それはさもありなんで，1813年のかのナポレオン戦争以来175年にわたり，全く戦争というものを経験していないのである。今日の先進各国の歴史を顧みるとき，これは驚くべきことといわざるを得ない。

したがって，国民1人1人の資質も穏健であり，物事を冷静に理性的に議論し，あくまでも話し合いを通じて妥当な結論を出して問題を処理する才覚をもっている。

世界の平和に貢献することにおいても極めて積極的であり，平和に役立つ良い具体策があれば次次にこれを国際場裡に提示して，その実現に向かって不断の努力を重ねている。

他面スウェーデン国民の独立自尊の精神にも敬服の念を禁じ得ない。良い意味で民族主義的であり，国民の連帯感醸成ということが常に強調され，これが政治の大きな柱のひとつとなっている。「ソリダリティー」という言葉は，日常最も頻繁に聞かれる言葉のひとつとなっている。

スウェーデンという国を象徴する言葉は，security であるという人がいる。ひとつは国防という観点からの national security であり，もうひとつは社会保障という観点からの social security である。外と内から，国民とその生活を守ろうという基本的哲学が根底にあるように思われる。

自国の安全の保障のためには徴兵制の下に強力な軍備を保持し，例えばスウェーデンの空軍は，欧州においては英国のそれと並び最強のものであるといわれている。国際平和のためには国連の平和維持軍に進んで自国の兵を提供し，また自国の防衛のためには毅然として闘うという強い気概が感じられ，敗北主義的言説はほとんど聞かれない。更に一朝有事に備え全人口800万余のうち600万人を直ちに収容できる地下防空壕が完備している。

このスウェーデンが，現在世界で最も進んだ福祉社会を実現している。人間の英知を結集した，現在考え得る限りの立派な制度であると激賞する人が多い。

人類愛の精神に基づき，強い連帯感を根底に置き，病気も老後も子女の教育にも心配のない，また広い空間を備えた住宅環境も確保されている社会であると賛美する人々が多い。

この福祉社会は，1976年まで実に44年の長きにわたり政権の座にあったスウェーデンの社民党政府の下に築き上げられたものである。（1982年に再び政権をとり，以後現在も社民党政権が続いている。）

ところで，1976年に政権が交代し，保守政権が実現したときに，世上しばしば，社民党政権の敗北は，高福祉，高負担の福祉政策の行き過ぎに起因するものであるというような評論をする向きがあった。当時私は職を奉じてストックホルムにいたが，わが国内からもかかる見方や意見がたびたび伝わってきた。

私は機会あるごとに内外に対し，このような見

解がまちがいである所以を繰り返し説明したのであるが，前述のような見方を述べる向きがあとを絶たなかったのは，まことに不可解というほかはない。

スウェーデンの政治を観察するに，そこでは与野党というものが，いわば同じ土俵の上で相撲をとっている。特に外交問題については，与野党の間に政策上の差異は存しないと断言できる。

これはまことにうらやましいことである。

与党と野党が外交政策で180度異なる方向を向いているということは，国民にとりはなはだ不幸なことである。

福祉政策についてもスウェーデンの与野党間にはその大綱においてコンセンサスができあがっている。本書の中で竹崎孜氏が，「自国の政治にスウェーデン人自身がよく『ベーシックには全面一致，争いはマージナルな部分でしか起こらない』と形容する。」(p. 106) と述べておられるが，まさにその通りだと思う。

ちなみに，スウェーデンの社民党は社会主義を目指す政党ではない。一例ではあるが44年間のその政権下に国有国営となった企業は，全国で5％にも満たないのである。

福祉社会を維持，強化してゆくことについて，スウェーデンの政財界有識者の間にネガティヴな見解はほとんどみられないといってよいであろう。

実際，世界の先進諸国において今後福祉社会の実現に努力を払うことは，国，国民の如何を問わず，避けられない方向であるといって過言ではあるまい。福祉政策の遂行をもって与野党を区別する尺度とすることは正しくないことであり，虚心に，良心的に研究した福祉政策に難クセをつけたり，足を引っ張ったりすることは許されてはならないことと考える。

人類の将来の社会を幸福なものにすることができるか否かは，正しい福祉政策がうちたてられるかどうかにかかっている。

例えば，わが国で大正の初期頃には人生50年というようなことがいわれていたが，爾来60年余年の間に人間の寿命は70数歳となり，現在では平均寿命は80歳になっている。人生50年が80年となったという厳然たる事実を前にして，この30年間の老いに向かう，あるいは老いた人生の生き方がいかにあるべきかについて確たる研究はあまりなされていないように思われる。確かに，超高齢化社会を背景にして，最近，国や地方公共団体，大学，研究機関等においてこの面の研究に着手しつつあるが，その速度はあまりにも遅く，内容は必ずしも十分ではない。福祉政策の研究というものは実に多岐にわたる困難なものであるが，広範な分野の学者，専門家を動員して着実にこれを重要な国策のひとつとして進めてゆかなければならないものであると考える。

本書は，各方面の関心と要望に応えるべく執筆された現下のスウェーデンの福祉社会の全貌を紹介する書物である。

本書の構成は，

第Ⅰ部においては，スウェーデンの社会保障の背景が述べられている。具体的には，スウェーデンの経済と福祉との関係，国家財政と地方財政の状況，これらを制度的に支える中央行政組織と地方制度，そして，政党や労働組合の状況，政治決定過程の特色について述べられている。

第Ⅱ部においては，所得保障について，基礎年金制度や附加年金制度，失業保険を中心とした労働市場政策，児童手当を中心とした社会手当，日本にはない住宅手当，そして公的扶助（生活保護）について述べられている。

第Ⅲ部においては，医療保障と社会サービスに関して，医療制度と医療保険，老人福祉サービス，障害者福祉サービス，児童福祉サービスについて述べられている。この部において，医療保障と社会サービスが一緒になっているのは，従来の分類からいって若干気になった点であるが，素人の私の思いちがいであればと思っている。

さて，従来から，スウェーデンの社会保障を紹介する本は沢山あったが必ずしも十分には関係者を満足させるものにはなっていないように思われる。断片的で体系的でないという問題があったり，素人の印象記的なものであったり，専門家の筆になるものであっても，日本の社会保障制度を十分知らないままにスウェーデンの制度を紹介するた

めに一部の人を混乱させたり，理論的掘り下げが不十分であったり，という問題が指摘されてきたように思われる。本書は，そういう意味での従来の欠陥をある程度克服しており，わが国にスウェーデンの社会保障を本格的に紹介する最初のものになるのではないかと思う。

本書のはしがきにもある通り，本書はスウェーデンの「社会保障の個別部門，たとえば医療，年金，社会福祉などについての国際的な制度研究はこれまでも行われてきている。しかしながら，それぞれの制度がどのように組み合わさって各国の社会保障を構成しているのか，は必ずしも明らかではない。各国の社会保障をいわば立体的に研究して，その歴史的発展や政治，行政，財政との関係を明らかにして，現状を判りやすく解説する」ものである。ということからも，その性格と意気込みが感じられよう。

このはしがきにもふれられているように本書には，スウェーデンの社会保障といわれるものが体系的に網羅されており，理論的に掘り下げた研究のあともみられる。聞くところによると，関係者が10数回にわたって集まってディスカッションを行った上にまとめあげられているということであり，各執筆者の論文にはそのあとが出ているように思われる。更に従来のものには，社会保障そのものの説明はあっても，何故そのような制度ができてきたのか，あるいは他の政策との関係はどうなっているのかなど，そのバックグラウンドや周辺領域についての掘り下げた記述がなかったが，今回はそのあたりが詳細に記述され，私のように社会保障について素人であっても理解できるような仕組みになっているのはありがたい。

私自身，ストックホルム在勤中に，私なりにスウェーデンの社会保障について勉強してきたつもりであるが，本書によってなるほどと思われるところがしばしばあった。

このような本ができたのも，その執筆者によるところが大きいと思う。本書の執筆者は，わが国の社会保障の研究機関である特殊法人社会保障研究所の内部，外部研究員すなわち同研究所の研究員および同研究所とつながりのある学者，行政官であり，文字通り，わが国およびスウェーデンの社会保障を語るにふさわしい陣容といえよう。

現下のスウェーデンの高度福祉社会の全貌は本書で紹介されている通りであるが，卓越した立派な制度の陰にいろいろな困難な問題が介在することも冷静に観察されてある通りである。

私自身の印象でも，スウェーデンにおいて，その福祉制度の形は見事にできあがり，物質面の基礎工事は尊敬に値するほど立派につくりあげられているが，その背後には精神的な福祉の問題が残っているように思われる。文字通り人はパンのみにより生くるものにあらず，仏は形としてつくられても，これに魂を入れることが重要である。しかし，これは至難事である。

また別の観点よりすれば，近代社会はいろいろな分野がよくバランスがとれていることが大切であると思う。それは大きく分けて生産と分配の問題についてもいえることであり，分配の面のみがあまりに重視され，国民の国家に対する依頼心，注文のみが高まっては，バランスのとれた社会の発展は期し得ないと考える。

しかし，いずれにせよ，私は高度福祉社会の長所はすべからく躊躇せずに導入すべきで，あらかじめ偏見をもって事に処しては物事は成就せず，成心をもって事に臨めば過ち多しであると考える。

要は先進国でできあがった福祉社会の制度に東洋の伝統的，精神的要素を更に加味してゆくことであると考える。現にスウェーデンにおいて，私は，わが国の伝統的家族制度の長所を重視する学者，専門家としばしば会合した経験がある。

今後の日本にとり最も重大な問題のひとつである福祉政策が官民双方により，物心両面よりますます研究されるにあたり，本書が必ずやその一助となるものと考えて推せん申し上げる次第である。

（とくら・えいじ　元在スウェーデン日本国大使）
（現スカンジナビア・ニッポン
ササガワ財団副理事長
現国際交流サービス協会会長）